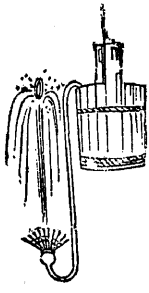
い清い心持のよい濱邊の、しかも夏の朝の五分間はどんなに私の心を洗ひましたでせうか。

暑中休暇

楓

學生が學屋の疲れをば夏の休みにぞ補はるゝ、まして公の試に有らん限りの腦力と身躰とを費し漸く許されて行李早々勇みて歸る古郷の我家、いとも樂しき事ぞかし。

住馴れし家はありし其まゝ笑みて迎へ給へる父母同胞喜びて右左よりありし事共物語る、父は愛で給ふ幅物を出し此は誰か筆、此は何など、其貴を語り給ひ、母は待ち受にとて紙布の織物なと見せ給ふ、弟は怪げなる片假名にて「クシベニ」など書ける清書を出してはこる、見るもの聞くもの一として樂しからぬはなし、三伏の暑さも樂しき家のまとゐに忘れ、朝な夕なのそゞろありさには弟妹を打つれ浪打ぎわの貝拾ひ露しげき夏草をわさり己がまゝなる自然の樂しみ限りなし、雪に螢に一歳の辛酸もわはれこの樂しみに打けたれて夢に過ぎ行く今日幾日、休みの日きりも殘りすくなになり、又も母をいそがせて、旅立の用意行李を調へて便船のあるがまゝに立ち出つめり。

うからやからは波止場に立ちて安らけく又の遇ふ日を期して別れを惜しむ樣もいとうれしゝ。

こたびは歸省の前と異りて、肉づき顏色もつや〳〵と身のうち凡て新らしくなりてもとの學屋へとかへり、己がじゝ務むるなりけり實に夏の休みこそ我等學生にとりてはいとも〳〵大事の賜物ぞかし。